

真夜中の太陽

Vol.1

キャンプの必需品

キャンプに欠かせない道具として、いくつか名前を上げるとしよう。テントはもちろん、タープ、バーナー、寝袋：と、沢山出てく。その中でも絶対忘れてはならない道具は「ランタン」です。夜のキャンプサイトでの「ライト」はタブー。やはり「ランタン」の明かりでのご飯や会話、夜の作業は楽しさを一層引き出してくれるもの。

私も先日、のっぽ衣笠店でランタンを購入しました。さっそく家で点けてみました。マンテル付けて、マンテル焼いて、白ガス入れてポンピングして、部屋の電気を消して：点火！白い光が部屋を明るく照らす：感動してしまいました。家に居ながらキャンプやつてるみたいな気分！仕事が忙しい日の夜の出来事でした。と、話は脱線しました。今月と来月は2ヶ月に渡り「ランタン」を特集します。ランタンの歴史や使い方、メンテナンス方法などをまとめてみました。道具の歴史を知り、より一層ランタンへの愛着を深めてください。

コールマンの歴史

1899年、旅先のアラバマ州でウィリアム・コフィン・コールマンはドラッグストアの店先にひとときを輝くランタンを見つけた。

うす暗い灯油ランタンが主流であった当時において、ガソリンによって燃えるマンテルが放つ鮮明な光は、彼に衝撃を与えた。コールマンは目が悪くクラスメイトに本を読んで聞かせてもらわなければならぬほどだった。このランタンがあれば、細かい文字も読めることを発見した。画期的な品質を誇るこのランタンに、彼は蓄えていたわずかな資金をすべて投げ打って購入し、大学の最終学年の学費の足しにしようと、セールスを開始した。が、ほとんど成果があがらない。というのも商店主たちは、その少し前にランタンのセールスマンに騙されて、星の光ほど明るくないランタンを買わされたばかりだったからである。コールマンの言葉に店主たちの心は動かなかった。そこで、彼はランタンのレンタル業を始め、彼らには「機能しなれば支払い不要」という彼の約束は、多くの人の信頼を勝ち得ていき、コールマンの事業は拡大。まもなくキング

フィッシャーの町は大草原の中に輝く灯台のようになった。契約は順調に増加したが、貸ランタンである限り、毎日のメンテナンスが欠かせず、売り上げの伸びがコストの上昇を招くようになってきた。これを解決するためにはメンテナンス不要の、信頼性の高い製品を作り、レンタルから、販売へと方針を転換しなければならない。1905年、コールマンはついにアーク・ランタンの自主生産へ着手。そして1909年には、ガソリンタンク付きのポータブル・テーブル・ランプを開発した。

都市では、電化の波が押し寄せ、やがては、国中に電気が行き渡ることは確実とされたが、まだ電気が通っていない農村では都市の人々と同じように明るいところで仕事がしたいという考えのもと、戸外で使えるランタンへの需要は高まる一方だった。

そうして、1914年、「コールマン・アーク・ランタン」が誕生したのであ

ランタンには、一世紀の歴史があるのに驚きました。電気がない時代には欠かせない道具として発達して、今なおアウトドアランタンでも決して欠くことのできないランタン。これからどうなるのでしょうか？



1914年マンテル式のアークランタン

1903年アークランプ

る。社名を「コールマン・ランプ・カンパニー」と変更した翌年のことであった。

アーク・ランタンの特長は、まずその明るさだった。夜中でも、家畜小屋の四隅は明々と照らし出され、人々から「真夜中の太陽」と絶賛されるほどであった。また約2リットルのガソリンで25～30時間の連続使用が可能であり、かつ倒れても火事はおろか燃料がこぼれることもなかった。事実、どんなところでも、安全に使用す

PRIVATE